

地域福祉とソーシャルワーク

コミュニティワーク vs. コミュニティ・ソーシャルワーク

井上 英晴

Community welfare and Social Work
- Community Work vs. Community Social Work -

Hideharu INOUE

Abstract

Community Social Work or Community Work? Which terminology is the more suitable in the area of social work practice under Community Welfare? I believe that question is very timely and relevant today. Kensaku Ohashi, the president of the Japan Community Welfare Society has emphasized, that, "community social work is the contemporary method in community-based social work". However, the Council of Social Welfare believes somewhat differently. "Community work is the only method of community welfare practice", a line taken immediately with little doubt. As result, Ohashi's terminology may be a bit confusing. In conclusion, I believe that the two contrasting terminologies can co-exist side-by-side, as such.

Key words : community social work, community work, community welfare,
(community-based) social work

キーワード：コミュニティ・ソーシャルワーク, コミュニティワーク,
地域福祉, (地域基盤) ソーシャルワーク

1. はじめに

現代の社会福祉は地域福祉であるとも言われる。古川孝順によれば、その新しい社会福祉(すなわち地域福祉)とは、市区町村という「地域社会における」社会福祉であり、同時に市区町村という「地域社会による」社会福祉でなければならないとされる¹⁾。

地域福祉に近い英国のコミュニティ・ケアにしても、コミュニティ・ケアが「地域における (in) ケア」－施設でなく地域社会において自立を可能とするもの (care in the community) とするのか、「地域による (by) ケ

ア」－親族や友人、仲間や近隣などのインフォーマルなケアを強調するもの (care by the community) とするのか論争されたが、杉本敏夫は、地域福祉にも同じような問題が問われ、現在では地域による (by) 福祉が地域福祉であるといわれているとし、岡村重夫が「care by the communityというものをやっていくためには、まず持ってコミュニティというものがなければならない²⁾」というのと軌を一にして、福祉サービスの提供とともに、(福祉) コミュニティづくりが地域福祉の側面として包含されている³⁾ と考えている。

加納恵子は地域福祉をcommunity work/community careと英訳し、住民自らの問題解決・まちづくり運動アプローチとしてのコミュニティワークの系と、在宅福祉サービスや予防・環境改善サービスなど、国・地方自治体の政策的問題解決計画アプローチとしてのコミュニティケアの系があり、両者をどのように構成するかによって、諸見解を生みだしてきた⁴⁾とする。

すると、community care (その核心はcare by the community)を推進するにも、community形成が必要であり、そのためにもcommunity workが必要である。それゆえ、コミュニティワークは、イクオール地域福祉実践の方法とされ、ソーシャルワークの中でも最も近いものであるとみられてきた⁵⁾のであり、「地域住民参加を軸に地域福祉を総合的に推進する専門的方法」⁶⁾とされるのである。

ところが、とくに事業型社協の提起(全国社会福祉協議会、1994年)、社会福祉基礎構造改革(1997年~2000年6月:社会福祉法施行)、そして介護保険導入(2000年4月)の頃から、コミュニティ・ソーシャルワークということが言われだされ、学会で発表もなされるようになった。そして、地域福祉学会会長でもある大橋謙策によれば、時代は「コミュニティワークからコミュニティ・ソーシャルワークへ」⁷⁾と展開したのであり、大橋の監修した『高校生が学ぶ社会福祉シリーズ第4巻 社会福祉援助技術第2版』中央法規、2001年では、コミュニティワークという言葉が放逐され、地域援助技術としてはコミュニティ・ソーシャルワークで一貫させられるまでに至っている。

これまで「地域福祉を推進していくための中心的手法であった」⁸⁾コミュニティワークは、もう用済みの概念として、コミュニティ・ソーシャルワークに止揚されてしまうのか、社会福祉協議会でコミュニティワーカーとして地域援助実践に携わってきた経験から、筆者はコミュニティワークの面白さ、底の深さを実感している。

地域福祉は、社会福祉の地域化(地域づくり)であり、社会福祉は地域を必要としており、その望ましい地域のあり方はコミュニティである。地域福祉は、また、地域社会の福祉化(福祉づくり)であり、地域社会は社会福祉を必要としており、その望ましい社会福祉のあり方は地域福祉である。

地域福祉が社会福祉法にも規定され、社会福祉協議会が「地域福祉の推進を図ることを目的とする団体」(109条)とされ、地域福祉の推進が一段と求められている現代であれば、その実践理論であるとされてきたコミュニティワークの概念と、大橋によればそれをも「包含する」⁹⁾と

されるコミュニティ・ソーシャルワークとの関係を、どう見定めるのか、それを試みるのが本稿の目的である。

2. コミュニティワーク

ここでは、コミュニティワークとコミュニティケア、コミュニティワークとソーシャルワークとの関連をさぐり、コミュニティワークの基本的立場を再確認したいと思う。

コミュニティワークとコミュニティケア(例えばベリリーによる類別¹⁰⁾)との関連を見てみると、care out the community(点のケア、地域社会と隔絶したケアのあり方)、care in the community(点と線のケア、地域社会と関わり薄いケアのあり方)、care by the community(面のケア、地域社会によるケアのあり方)とは言われても、高橋信行が「コミュニティの病理と個人の社会的困難さは区別しなければならないだろう。(中略)コミュニティそのものを治療することと、コミュニティにある個人や集団を援助することは基本的に区別して考えなければならない。現在の地域福祉の議論はともすれば後者の視点に流れがちである。コミュニティ・オーガニゼーションはコミュニティそのものの治療の側面をもったソーシャルワークの方法であるが、最近の在宅福祉やコミュニティケアに関する議論は、コミュニティそのものの再生というよりは、コミュニティという場における福祉サービスのありようの問題である」¹¹⁾と云うようなコミュニティの形成や再生、コミュニティそれ自身への働きかけというコミュニティワークの側面は、対人福祉サービス(personal social services)提供の枠組みであるコミュニティケアにそこまでの役割を課すのは無理なようである。それゆえ、正村公宏が言う、「ノーマライゼーションの思想を実践する基本的方法は、『地域福祉』である。英語では『コミュニティ・ケア』と呼ばれている。『地域福祉』という言葉は単純に『地域のなかの福祉』という意味に理解してはならない。『地域福祉』は、『地域のなかでこそ福祉を』という方法論である。」¹²⁾から、地域福祉=コミュニティケアというわけにはいかない。地域福祉にはコミュニティケアとそれを可能にし支持するコミュニティワークが共に必要であろう。

また、コミュニティワークとソーシャルワークとの関連では、牧里によると、1)個別化した対応、2)プロセス指向の方法、3)問題解決を社会資源との結合を通じて展開する方法、4)人間の社会関係の調整、組織化に関わる、5)ソーシャルワーカーという専門家の介在を共通点とし、他方、コミュニティワークを地域援助技術とし、他のソーシャルワークを個別援助技術、集団援助技術とし

て捉えた場合の相違点としては、1) 社会調整よりも社会変革、2) 心理的・社会的問題よりも政治的・社会的問題を対象、3) 社会資源の有効利用よりも社会資源の調整・創設・開発、4) 個別対面性よりも地域結合性、などがあげられるとしている¹³⁾。

これらの相違点と、例えばアラン・ツウェルヴツリースがコミュニティワークを「市民が集団的行動で自分たち自身のコミュニティを改良するのを助力するプロセス」¹⁴⁾としている点などを斟酌すれば、地域社会の変革をめざすコミュニティワークの「ラディカリズム」¹⁵⁾は、やはり貴重であると言わざるを得ない。

3. コミュニティ・ソーシャルワーク

コミュニティ・ソーシャルワークとコミュニティケア、そしてコミュニティ・ソーシャルワークとソーシャルワークとの関係はどのようになっているのであろうか。

コミュニティ・ソーシャルワークは、1982年に英国で公刊されたパークレー報告書「ソーシャルワーカー：役割と任務」の多数派意見やハドレイ少数派が提起あるいは取り上げた概念である。これを藤井博志は「コミュニティケアをすすめるソーシャルワークの方法」¹⁶⁾とし、小田兼三は「コミュニティケア志向のソーシャルワーク」¹⁷⁾としている。また、菱沼幹男はソーシャルワークにおいて「コミュニティケアの実践モデル」¹⁸⁾と位置づけられるとしている。これらからも、コミュニティ・ソーシャルワークは、コミュニティケアを推進するソーシャルワークと言ってよいであろう。

ところで、コミュニティ・ソーシャルワークはどのようにコミュニティケアを推進するソーシャルワークなのだろうか。大橋謙策に聞こう¹⁹⁾。

- ①コミュニティソーシャルワークは地域に着目し、そのエネルギーに焦点を当てながら、個人及び家族の現在ある社会的ケアニーズに応え、時には唯一のカウンセリングサービスの提供者になるとともに、同時にサービス利用者を支える親類、近隣、ボランティア等の社会的ケアネットワークづくりを行い、かつ将来同じようなことが起きないように対応策を考えた活動を統合的に行うこと。
- ②コミュニティソーシャルワークは非公式的ケア（インフォーマルケア）を十分に考慮に入れて、公的サービス、民間サービス等との間にパートナーシップをもつこと、またそれら公式的サービス組織と非公式的ケアネットワークとのパートナーシップを重視し、それらのサービスを動員する社会的ケア計画に基づいて融通性のある地方分権型のシステムをつくり、実感す

ることを考え方の基本にしているといえる。

- ③日本でも、1990（平成2）年に社会福祉関係八法改正が行われ、在宅福祉サービスを軸に地域自立生活を支援するという考え方と実践方法が展開されるに伴い、同じような実践（*ソーシャルワークの三分法を取らないジェネリックな実践）が求められる条件ができた。同じ1990（平成2）年に厚生省社会局保護課の所管の下に設置された「生活支援事業研究会」が報告書のなかで、地域を基盤として、個人や家族の生活課題をエコロジカルに分析し、制度的サービスのみならずインフォーマルケアも含めて、かつ専門家がチームを組んで援助するチームアプローチ方式も取り入れた統合的な援助のあり方の必要性とそのモデル事業化を提案している。それは、「ふれあいのまちづくり事業」へと政策化された。
- ④従来、地域福祉に見合う社会福祉方法論として、コミュニティ・オーガニゼーションが考えられていたが、それは個別課題を抱えている人には必ずしも直接的に関わりをもたず、その抽象的・外延的援助のための地域住民の組織化や、大多数の地域住民の共通関心事の解決には取り組んできたが、地域で個別生活課題を抱えながら、地域自立生活を望んでいた人々への個別援助とそれを支えるソーシャル・サポート・ネットワークづくりとを総合的に展開するという実践は弱かったといわざるを得ない。これからは、従来のコミュニティ・オーガニゼーションの理論モデルとカウンセリング的個別援助理論モデルとを地域で統合的に提供することが必要になってきている。
- ⑤今求められているコミュニティソーシャルワークとは地域自立生活上サービスを必要としている人に対し、ケアマネジメントによる具体的援助を提供しつつ、その人に必要なソーシャル・サポート・ネットワークづくりを行い、かつその人が抱える生活問題が地域で今後同じように起きないように福祉コミュニティづくりとを統合的に展開する、地域を基盤としたソーシャルワーク実践である。それは、地域自立生活支援のための個別援助を核として、歴史的に構築されてきたコミュニティ・オーガニゼーション（コミュニティワーク）の理論、考え方を包含したものである。そのような地域を基盤としたソーシャルワークの考え方が今後のソーシャルワークの中心的アプローチ法になると考えられる。これからの地域福祉のポイントは、新しい社会福祉のサービスシステムの根幹である、このコミュニティソーシャルワークがどう展開できるかである。

コミュニティ・ソーシャルワークが、以上のような大橋の言うようなものか、また、大橋の言うようにコミュニティワークを包含したものであるのかどうか、パークレイ報告書に照らしても定かではないようである²⁰⁾。もしそうだとすれば、この大橋の見解は、大橋流に解釈・拡張されたコミュニティ・ソーシャルワークと言うべきものであろう。大橋にとって、パークレイ報告書の読解が問題なのではなく、社会福祉基礎構造改革の時代に合った日本の地域福祉実践理論が要請されており、自分はそれを展開するのだというのであれば、パークレイ報告書と結びついたコミュニティ・ソーシャルワークという語を用いるのは、誤解を招くものではないだろうか。大橋説は、パークレイ報告書流コミュニティ・ソーシャルワークであるかないかは別にしても、傾聴に値する論説であることは間違いない。

また菱沼幹男は、コミュニティ・ソーシャルワークは、ハドレイらのパッチ・システムをはじめ、多様な実践形態により展開されたが、その先行研究及び実践とその課題を整理すると、コミュニティ・ソーシャルワークに最低限に求められる視点として以下のような点が見いだされるとしている²¹⁾。

- (1)インフォーマルケアを視野に入れ、パートナーシップを重視する。
- (2)ソーシャルワークの方法を活用し、それらの統合的応答を図る。
- (3)問題解決だけでなく予防的側面を重視する。
- (4)サービスへのアクセス性や機関から住民への接近性を高めるため、小地域への分散化と分権化を必要とする。
- (5)一人のソーシャルワーカーのアプローチではなく、チームアプローチとして展開する。

この菱沼の見解は、大橋に比べれば、パークレイ報告書により近いものと言えるのではないだろうか。ところで予防的ということであるが、佐々木敏明は、プロセス志向の原則というソーシャルワークの特色を解説しながら、「地域の目に見える具体的な課題の達成も必要だが、そこにいたるまでのプロセス自体をより重視し、その総

合としての参加・協働する態度、いいかえると、地域社会の全体的調和の確立こそ主要な目標なのである。多少時間がかかっても、プロセス・ゴール (process goal) を達成するほうが恒久的な問題解決、ならびに、問題発生予防にもっとも有効である²²⁾ としている。ついでながら、コミュニティワークがプロセス・ゴールを重視する方法論であることは、論をまたない。

4. コミュニティワーク対コミュニティソーシャルワーク

ここでは、地域福祉実践におけるコミュニティワークとコミュニティソーシャルワークとの関係について見ていく。

1) 菱沼幹男は、「従来、地域福祉実践は社協が推進してきたこともあり、コミュニティワークが軸にされてきた。しかし、コミュニティワークは保健衛生や教育、環境問題等、地域における住民共通の「地域課題」に対する組織化の方法として有効であるが、地域ケアシステムにおいては活用し得る一つの方法に過ぎない。求められるのは、地域に暮らす一人ひとりへのケアとそれを可能にするシステムであり、地域における「個別課題」に対する方法である。そこで注目されるのがコミュニティ・ソーシャルワークであり、その視点を明らかにした上で、地域ケアシステムとしてのコミュニティ・ソーシャルワーク云々」と分析評価し、上のような表-1にまとめている²³⁾。

なるほど、これは両者の相違には違いないが、地域ケアシステムの構築や地域ケアの展開には、個別支援・個別化の視点を重視するコミュニティソーシャルワークの方がより有効だ、と菱沼は言っているに過ぎない。

[個人-社会] 関係をどう解くかはいつの時代の課題でもある。地域ケアに関しても、[個人]あるいは[社会]のどちらをより焦点化、出発点、軸足、あるいは中心化して考えるのか、また、両者の連続性と非連続性をどう見極めるか、ということである。地域福祉実践における地域ケアの重要性は言うまでもない。だからといって、地域福祉実践=地域ケアであるとも、地域ケアシステム

	コミュニティワーク	コミュニティ・ソーシャルワーク
課 題	地域における地域課題	地域における個別課題
関与の対象	コミュニティ内の集団・組織	個人とそのインフォーマルネットワーク
アプローチの性質	プロセスゴールの重視	予防的側面の重視

表1. コミュニティワークとコミュニティ・ソーシャルワークの違い

の構築や地域ケアの展開にコミュニティワークがより無効だとも言えない。筆者に言わせれば、この表は、地域ケアを含む地域福祉実践にはコミュニティワークとコミュニティ・ソーシャルワークの両者が共に必要である、ということを示している。

2) 加納恵子は大橋謙策の論を、「利用者としての当事者住民の主体形成のみならず、支援の輪に入るボランティア住民の主体形成にしても、福祉教育的アプローチによる個別支援・個別化（ボランティア・コーディネートの充実）の手法を強調して、『その人が抱える生活問題が地域で今後同じように起きないように福祉コミュニティづくり』をすると、個別支援の視点が地域組織化においても貫かれている」²⁴⁾と評している。

人は誰でもパーソナル・ソーシャル・ネットワーク（personal social network）を張って暮らしている。これは〔個人発の絆（tie）で結ばれた社会、あるいはパーソナル・コミュニティ、personal community〕と言えよう。個人の経験世界、つまり個人によって生きられる社会である。そのネットワークは、援助に焦点を当てた関係性で見ると、支持的（サポーティブ、supportive）であるとは限らないが、支持的であれば、それはソーシャル・サポート（ネットワーク、social support network、formal、informalなその有機的な総合）とも呼ばれる。これは福祉関心を核とすると、〔個人発の福祉コミュニティ、personal welfare community〕とも呼べよう。これらが当事者ごとに形成されれば、それらは地域福祉実践から見て、個別支援の視点に貫かれた地域組織化の一つと言える。

しかし、個人によって生きられる経験世界は限られている。地域社会は、個々人の、個々人の経験の総体以上のものである。発生予防も含めてより根本的な福祉対応を地域社会でめざすなら、個人発を超えて、類化、普遍化された地域課題として把握された施策や福祉コミュニティづくり等が必要とされよう。そうした取り組みへの途はむしろコミュニティワークの役割機能に属するものである。ここでもコミュニティワークとコミュニティ・ソーシャルワークとは共に必要な地域福祉実践方法と言えよう。

3) 「事業型社協」論を分析して佐藤順子²⁵⁾は、『個からのアプローチと地域からのアプローチの統合』とはいうものの、『地域志向型の個のケアの問題からのアプローチ』にすぎないのではないか」と疑問を呈し、更に進んで、「社協に求められる機能・方法＝コミュニティ・ソー

シャルワークという見解」を分析して、「社協に求められる」のではなく、「事業型社協に求められる」方法・技術ではないかとしている。そして英国の論者を援用して、コミュニティ・ソーシャルワークは、(1)コミュニティワークの一部であり、サービス供給に焦点づけられた（サービス供給志向型の）コミュニティワークと、その地域の問題を発見し、立ち向かい、解決するための行動を起こす住民を支援する住民に焦点づけられた（コミュニティ志向型の）コミュニティワークとの前者の型であり、(2)クライアントの問題をより構造的欠陥（structural deficiency）としてとらえ、プロセス・ゴールを重視し、住民を側面的に援助する非指示的（non-directive）な介入スタイルをとるよりも、個人の能力の欠如（individual incapacity）と構造の両方に起因する複合的なものとしてとらえ、どちらかという住民を指導するという指示的（directive）な介入スタイルをとるものである、との分析を（紹介）している。

4) 谷口正隆はマルコム・ペインの図式²⁶⁾を引用しつつ新たな図表（図7-1、表7-1）を提示し、次のように言う²⁷⁾。「ここ（*マルコム・ペインの図式）では『コミュニティワーク』ではなく『社会的ケア計画を含むコミュニティ・ソーシャルワーク』が、コミュニティにかかわるものとして描き出されているのみである。この『社会的ケア計画を含むコミュニティ・ソーシャルワーク』とは、社会的なケアの大部分を受けもつ地域の親族・近隣など非公式なネットワークに着目したケア計画をつくり、こうした地域内のネットワークとの共同活動を目指すソーシャルワークなのである。こうした意味では正面からコミュニティに取り組むというよりも、公的なサービスと非公式なケア・ネットワークとの連携を重視したものにすぎない」と。

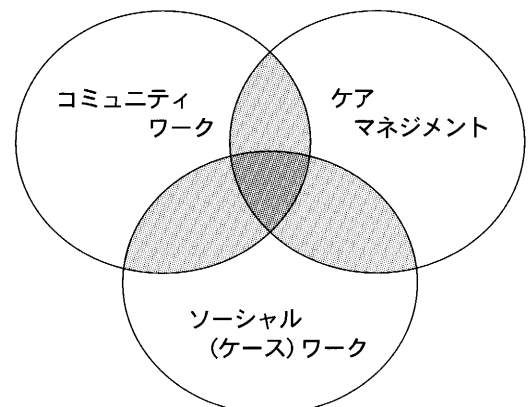


図1. ソーシャルワークの三層構造

ソーシャルワークの局面	ソーシャルワーク実践の要素	実践の目的	ワーカーの関与の範囲
臨床的ソーシャルワーク	※カウンセリング ※イネープリング	※感情・意向の表出 ※心理的再起 ※対処能力の向上	本人・介護者 親族・近隣
ケアマネジャー	※アセスメント ※ケア計画 ※サービスの提供 ※モニタリング	※社会的ニーズの明確化 ※資源の創出, 動員, 連携 ※社会的ニーズの充足	本人・介護者 親族・近隣 サービス提供機関 地元住民
コミュニティワーク	※アドボカシーの助長 ※エンパワーメント ※ソーシャル・アクションの 推進	※コミュニティのニーズの明確化 ※クライアント集団の生活条件と 社会的影響力の向上 ※資源の創出, 動員, 連携 ※政策, サービスの開発	セルフヘルプ・グループ 近隣・地元集団 利害関係集団 行政関係集団 政治家

表2. ソーシャルワーク実践の要素

社会的ケアプランやカウンセリングについて、パークレイ報告の翻訳者・小田兼三は、次のように解説している²⁸⁾。「(*パークレイ報告は) ソーシャルワーカーの役割をケアプランの策定とカウンセリングの実施という2本柱に措定して、(中略) 今後のコミュニティ・ソーシャルワーカーに期待される役割と任務は、社会的ケアプラン (social care planning) とカウンセリングとの統合的応答 (integrated response) を、一人のワーカーが遂行するところにある。従来のケースワーク、グループワーク、コミュニティワークという3方法のワーカー間の分業体制を組み直して、一人の一定地域担当のコミュニティ・ソーシャルワーカーが社会的ケアプラン、カウンセリングを統合させつつ、コミュニティで生活するクライアントに対応するというモデルなのである」。

これをパークレイ多数派報告に参加したロジャー・ハーグリーブズ (山口稔訳,²⁹⁾ でみてみると、ソーシャルワーカーの二つの特徴的活動は、「その一つは、われわれが『カウンセリング』と呼ぶもので、クライアントとソーシャル・ワーカーの直接的コミュニケーションや相互作用の過程であり、それを通して、クライアントは自分たちの状況や環境を改善したり、それらに耐えることへの手助けを受けるものである」というもので、ハーグリーブズは、これは「ケースワーク」という専門用語がもつ意味とほぼ一致していようと言っている。そして「もう一つは、われわれが『ソーシャル・ケア・プランニング』と呼んだもので、仲介、調整、組織化といったソーシャル・ワーカーがするすべてのことを、その傘下に入れてしまうもの」として使った用語だということである。そしてそれは、「全般的なレベル (*「ソーシャル・ワーク」の間接的活動、すなわち、個々のクライアントには焦点を合わせないソーシャル・ケア・プランニング」-ハーグリーブズ) でも、個々のクライアントに対しても行わ

れうるものである」とし、「要するに『ケースワーク』という語は、『カウンセリング+ソーシャル・ケア・プランニング』と読めるものであり、ソーシャル・ワーカーとクライアントの相互作用には、通常、この両方の要素が含まれていることを、われわれは認識している」とし、コミュニティ・ソーシャルワークは「一対一のソーシャル (ケース) ワークより、生産的で価値がある³⁰⁾」と言っている。ここではコミュニティワークへの直接的な言及はない。

こうしたハーグリーブズ-小田兼三の論説に、野中猛のケアマネジメント論の指摘³¹⁾ をからましてみよう。「ケアマネジメントの最終的な目的はふたつあり、事例に対する具体的な支援を適してそれらを達成することに最大の特徴がある。ひとつは、ケアマネジメントは生活に困難さをもっている人々に注意を向けている。彼らに対して、さまざまな種類の支援を適切に組み合わせ、ひとそろいのパッケージとして提供する。そのことで、利用者の能力が高まり、最終的に自立的な生活ができることをめざす。すなわち、利用者のセルフケア能力を向上させることが一方の目的である。もうひとつは、ケアマネジメントは地域社会に目を向けている。一例の事例を支援することを通して、さまざまな領域の、さまざまな職種や、家族や近隣の人々がネットワークを形成することになる。そのことで、また別の事例に対応しやすくなり、地域の問題解決能力が向上する。すなわち、地域のコミュニティづくりがもう一方の目的である。この視点によって、ケアマネジメント活動はすぐれて地域保健の実感活動につながる」。ここで野中の言う「地域保健」は「地域福祉」とも置き換えられよう。

野中の論を見れば、コミュニティ・ソーシャルワークはその技術 (手法) としてケアマネジメントを多用することになることは間違いない。それはコミュニティワー

クにとっても、ニュアンスや程度の違いはあれ、必要とすることにもなる。谷口のソーシャルワークの三層構造論をもとに、小田、ハーグリーブズ、そして野中を勘案すると、コミュニティワーク+ケアマネジメント+地域計画=（新）コミュニティワーク、ソーシャル（ケース）ワーク+ケアマネジメント=コミュニティ・ソーシャルワークという捉え方もできるのではないか。

また、「ケース・マネジメントはクライアントの心理的の側面よりも社会環境との関係を強調するものであり、ケースワークの一部とも捉えることができる」と言う白澤政和は、地域福祉はクライアントの社会生活全体の把握と地域社会の全体的理解に基づいて推進されるものとして下図を掲げている³²⁾が、地域福祉はコミュニティ・ソーシャルワークとコミュニティワークとが相俟って推進されることも、この図は示唆しているのではないだろうか。

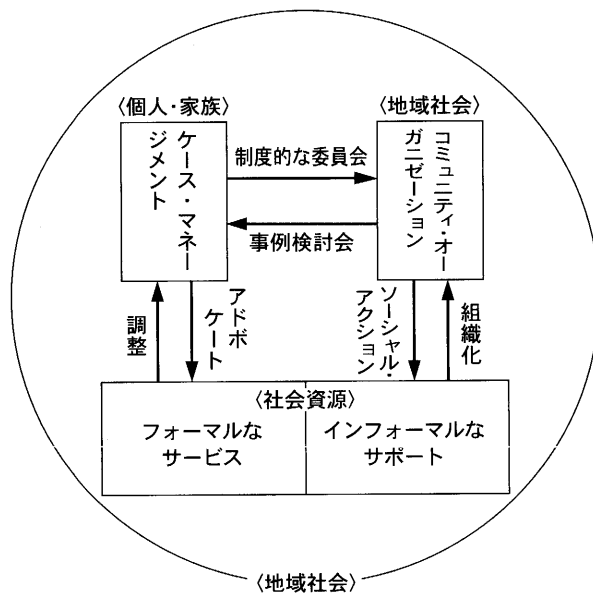


図2. 地域福祉におけるケース・マネジメントの位置

おわりに

社会福祉協議会のあり方や実践に引きつけてみれば、コミュニティワークは「運動型社協」のソーシャルワーク、コミュニティ・ソーシャルワークは「事業型社協」のソーシャルワーク、そして「総合型社協」のソーシャルワークは、両ワークを総合したものと見えようか。

コミュニティワークそのものを仕事内容としている「コミュニティワークの第1次機関」(濱野一郎³³⁾)こそが社協であるという結論を、濱野と共に佐藤順子もまた共有しているが、筆者はもう少し柔軟に、コミュニティワークはコミュニティ・ソーシャルワークに学んで、①

誰もが可能な限り自立した生活ができるように支援するためのコミュニティワーク、②地域住民の生活に密着したコミュニティワーク、③保健・医療・福祉の連携体制のもとでのコミュニティワーク、④エンパワメント志向のコミュニティワーク、⑤フォーマルとインフォーマルなサービスを視野に入れたコミュニティワーク、⑥コミュニティワーカーの専門性の向上（以上杉本敏夫³⁴⁾）を展開していくとよいと思う。

地域福祉の推進にとって、コミュニティワークとコミュニティ・ソーシャルワークとは車の両輪であり、どちらも必要であると考えたい。これはつまり、コミュニティとコミュニティ・ソーシャルワークとが互いに他を含み込んでいるという（英国の論者や大橋の）立場を取らないということである。

注

- 1) 古川孝順：社会福祉のパラダイム変換。有斐閣，東京，p.140，1997.
- 2) 岡村重夫：コメントへのこたえ：社会福祉の日本的展開。全国社協，東京，p.195，1978.
- 3) 杉本敏夫：社会福祉と地域福祉：新しい社会福祉。中央法規，東京，p.6，1996.
- 4) 社会福祉用語辞典。第3版，ミネルヴァ書房，京都市，2002.
- 5) 高森敬久：地域福祉論。佛教大学，京都市，p.26，1995.
- 6) 社会福祉辞典。大月書店，東京，2002.
- 7) 社会福祉士養成講座編集委員会：新版社会福祉士養成講座7 地域福祉論。中央法規，東京，pp. 26～28，2001.
- 8) 杉本敏夫，齊藤千鶴：コミュニティワーク入門。中央法規，東京，p. 18，2000.
- 9) 大橋謙策：新しい社会福祉サービスシステムとしての地域福祉，7) に同じ，p.26.
- 10) Bayley, M.: Mental Handicap and Community Care. Routledge & Kegan Paul, London and Boston, p.20, 1973.
- 11) 高橋信行：現代社会におけるコミュニティと地域福祉：現代地域福祉論。法律文化社，京都市，p.6，1992.
- 12) 正村公宏：日本をどう変えるのか。日本放送出版協会，東京，p.170，1999.
- 13) 牧里毎治：地域組織化活動の視点と方法：地域福祉講座6。中央法規，東京，pp.16～19，1985。およ

- び牧里毎治：地域援助技術の概念：新版社会福祉学習双書2002 7 社会福祉援助技術論. 全国社協, 東京, pp.151-155, 2002.
- 14) Twelvetreets, A.: Community Work. Macmillan Press LTD, London, 2 nd ed. p.1, 1991.
- 15) 加納恵子他：地域福祉援助技術論. 相川書房, 東京, p.44, 2003.
- 16) 藤井博志：コミュニティ・ソーシャルワーク：福祉キーワードシリーズ ソーシャルワーク. 中央法規, 東京, p.172, 2002.
- 17) 小田兼三：コミュニティケアとケアマネジメント. ソーシャルワーク研究 25 (4) : 42, 2000.
- 18) 菱沼幹男：コミュニティ・ソーシャルワークの視点と実践評価の枠組みに関する考察：日本地域福祉学会第16回大会報告要旨集. P.321, 2002.
- 19) 大橋謙策：新しい社会福祉サービスシステムとしての地域福祉, 7) に同じ, pp.28~29.
- 20) 佐藤順子：事業型社協論にみる社協の機能と方法に関する一考察—コミュニティ・ソーシャルワークの概念の適用とその優先性をめぐって. 地域福祉研究 27 : 106, 1999の「コミュニティ・ソーシャルワークの概念が明確に示されている箇所をバークレイ報告の中に見つけ出すことは困難である」との分析を参照.
- 21) 菱沼幹男：コミュニティ・ソーシャルワークの視点と実践評価の枠組みに関する考察, 18)に同じ, p.321.
- 22) 佐々木敏明：方法としてのコミュニティワーク：ソーシャル・ワーク. 海声社, 東京, p.116, 1984.
- 23) 菱沼幹男：コミュニティ・ソーシャルワークの視点と実践評価の枠組みに関する考察, 18)に同じ, p.320.
- 24) 15) に同じ, pp.81~82.
- 25) 佐藤順子：事業型社協論にみる社協の機能と方法に関する一考察, 20) に同じ, pp.104~108.
- 26) Payne, M.: Social Work and community care. Macmillan Press LTD, London, p.2, p.146, 1995.
- 27) 谷口正隆：地域福祉サービスの方法：地域福祉論. 建帛社, 東京, p.140, 2001. なお, 谷口の図表は, 図は同上p.141, 表は同上p.142から引用.
- 28) 小田兼三：コミュニティケアとマネジメント, 17) に同じ, pp.42~43.
- 29) ハーグリーブズ (山口稔訳)：コミュニティ・ソーシャルワークの意味：月刊福祉 67 : 85, 1984.
- 30) ハーグリーブズ：コミュニティ・ソーシャルワークの意味, 29) に同じ, p.81, p.83, p.85.
- 31) 野中猛：図説ケアマネジメント論. 中央法規, 東京, p.15, 1997.
- 32) 白澤政和：地域福祉の推進とケース・マネジメントの実際：社会福祉研究 42 : 46, 1988.
- 33) 濱野一郎：コミュニティワークとは何か：コミュニティワークの新展開. みらい, 岐阜市, p.15, 1996.
- 34) 杉本敏夫：社会福祉基礎構造改革とコミュニティワーク：コミュニティワーク入門. 中央法規, 東京, p.18, 2000.